



今年も右顧左眄することなく

信ずる道を歩みます

**行蔵は我に存す 毀譽は他人の主張
我に与らず 我に聞せず存じ候**

NHKの大河ドラマ「篤姫」は予想外の視聴率をもって終了しました。このドラマはもとより「篤姫」と「小松帯刀」の人間模様を中心に、西郷隆盛、勝海舟などの歴史的著名人を配したところにも、視聴者を引き寄せる原動力になったことでしょう。

さて、冒頭に掲示した難解な言葉は勝海舟と福澤諭吉の人間模様を表した文章です。幕臣の一人であった勝は大政奉還の後、世界の大海に船出した日本丸の為に、過去の怨念を払拭して明治政府の頭脳として活躍しておりました。

しかし、これを変節とみた福澤は猛反発、勝の行動を「日和見」と誹謗し、屢々、手紙の中で叱責していたのであります。

これに対し、福澤の主張を久しく無視してきた勝でしたが、遂に業を煮やして一通の書状に「吾が意を書き送ったのでした、それが冒頭の言葉です。」

手紙の趣旨は、「出処進退（行蔵）は自身が決すべきもの、そのことを非難するも、逆に誉めそやすのも（毀譽）所詮、今のあなたの立場が言わせるのであって、私には一切関わるも

のではありません。』という内容でした。

新年早々のScopeの書き出しにはいささか唐突ですが、正直に云って、動乱の明治維新を乗り切った先人に比べ、昨今の政治に携わる人々の「勇気」と「信念」には大きな隔たりを感じるのには私ばかりではないでしょう。

若い頃から私は「怖いもの知らず」一辺倒

理解出来ない

杵築市の雇用対策

今朝（12月24日）の新聞にも、大分県の杵築市の市長が「時の顔」として登壇しております。

キャンノン工場的大量解雇に伴って、失業した若者たちを臨時職員として、最長一ヶ月間、市役所で雇用するとの決定に対し、無条件で拍手する日本の報道機関に私は正直に云って疑問を抱かざるを得ません。

確かに突然解雇になった派遣労働者には年の瀬を迎えての失業はもとより気の毒ですが、本当に杵築市の執った選択が正鵠を得たものでしょうか？寧ろ私には大きな誤りであり、大向うを唸らせたいという政治家特有の短絡的発想と考えるのであります。

で如何なる権力にも畏れることなく、その結果、家族や後援者に迷惑を掛けてまいりましたが、恐らく朴訥で、直線思考のこの性質は所詮、治せる代物ではないでしょう。

そんな私ですが本年もよろしくご後援ください。

平成21年は私達の街にとっては選択の年、3月の市議会選挙、7月の知事選挙、そしてタッチ・ロールのままに何時、解散になるか判らない衆議院選挙、と立て続けの選挙の年であります。

明日の幸せに期待して確かな一票を。

失業した青年たちに今必要なものは「就職」の二字のみであります。恰もかつての失業対策労務の如き単純労務と、月15万円にも満たないアルバイト賃金は、今の彼等が従事すべき仕事でしょうか。公園の清掃など「ために作られた業務」で本来必要な就職活動ができなければ、本末転倒の最たるところでしょう。

優しい気遣いがあるなら、市民に限って無担保、無保証で20万円程度融資して「就職活動」に専念していただければ如何でしょうか。

更に追伸すれば、譬え人間関係が希薄になったとはいえ、昔から親、兄弟、親戚など「血は水よりも濃い」の格言があれば、頼ることによって、「拾う神」に出会うこともありましょう。

京都知恩院の山門を救った「伊伝」

過日、横内町の来迎院（この歴史シリーズの冒頭で紹介）の晋山式が盛大に開催され、その席上、静岡でトップの大地主である「伊伝」の渡邊朗理事長から、隠されてきた「伊伝」の歴史を紹介されました。

どのような歴史的背景や経過を辿って、伊豆の松崎から出た「伊伝」が呉服商・両替商を営みながらも、静岡市内の広大な商業・住宅地域を掌中にしていったのか、誠に興味深いところですが、ここでは省かせて戴き、その祝賀の席で知った「伊伝史」のひとコマを書き添えてみます。

大政奉還によって誕生した明治政府は、時をかわさずして様々な政策や法律を整えたのでありましたが、その一つに宗教政策として、神仏習合を否定すると共に、神道の国教化をめざした運動は、やがて「廃仏毀釈」の号令となつて、全国に広まり、各地で寺院・仏像の破壊や僧侶の還俗強制が行われていったのでありました。

こうした流れの中で明治24年、経済的に困窮した浄土宗の総本山「知恩院」

の山門（三門）までもが異国に売却されようとしておりました。

この危機に当って、六代目伊豆屋伝八こと渡邊直道は以前から知恩院と深い因縁を持っていたことから、この時にも、東

一寸一言 私の雑記帳から

徳川吉宗の事

最近読んだ本の中で記憶に刻まれた小さな挿話をご紹介します。

私の場合には例によって歴史本からですが、15代の徳川将軍の中で、8代徳川吉宗の生涯は家康と並んで誠に興味の尽きない、また示唆に富むものであります。

吉宗は紀州藩の徳川光貞の4男として生まれたものの、貧しい経済環境に置かれ、成人しては越前（福井）の葛野藩主となったものの物質的には常に恵まれない運命を歩まされてきました。

宝永3年（1706）紀州藩主に迎えられることから吉宗はそれまでの悲運が逆転、享保元年（1716）7代将軍家継の夭逝に伴い、あろう事か8代将軍に推戴され、後に世に江戸3大改革の一つと謳われた「享保

奔西走して浄財を集め、自らも多額な寄付をして山門の海外流出を防いだとのことでありました。その努力によって今日の国宝「知恩院」が存在していると言っても過言ではないでしょう。

※僧侶が新たに一寺の住職となる式の改革」に着手していくのであります。

將軍となった吉宗は早速、「質素儉約」を第一とした財政の再建策を始め新田開発、官僚制度の改革、江戸の町火消しの制度、小石川養生所の設立、また目安箱による庶民の意見の聴取や民生の安定など徹底した無駄の排除、儉約の推奨を図ったのであります。

処で、日本橋の高札には「將軍に直訴したいものは住所・氏名を記した上で申せ」と書かれていたにも拘らず、沢山の投書が寄せられていたとの事でありました。

その中に、或る軍学者は「金持ちが贅沢品に散財するから職人や商人の仕事が成り立つのだ」と吉宗の奢侈の禁止政策を痛烈に批判したものがありました。この投書の内容は現代用語に置き換えれば「内需拡大策」であり、吉宗の改革精神とは真つ向から対立するものであったが、この勇氣ある提案に対し、吉宗は賞をもってこれを労ったのであります。

現代政治も斯くありたいものです。

彩時記 植物で、冬の部屋と心にうるおいを

お正月過ぎから立春にかけては、一年で一番寒さの厳しい季節。風邪やインフルエンザに負けないよう、健康管理に注意を払いたいものです。

特に室内の乾燥は、風邪のウイルス蔓延の大きな要因。最近ではエアコンと一緒に加湿器を使用している家庭も多いようです。乾燥防止には加湿器を使うのが一番効果的ですが、プラスアルファの対策としておすすめしたいのが、室内に植物を置くことです。生花にせよ鉢植えにせよ、植物と水分は必ずワンセットになっていますから、加湿器ほどの効果はなくとも、室内の空気にうるおいが増えることは期待できます。

それに、きれいな色の花や緑は、何よりも眺める人の心にうるおいを与えてくれます。色が少ない冬枯れの季節だからこそ、身近なところに植物を置いて一足早く春を楽しみたいものです。生育が早く栽培が簡単な水栽培の球根なども、この季節のインテリアにぴったりです。春が来るまでもうしばらくの間、生命力あふれる植物たちと一緒に元気に冬を乗り切りましょう。